

児童の人権作文に学ぶ

青空に白い入道雲とセミの声。照りつける太陽の下には、夏休みの子どもの元気な笑い声が聞こえてきます。市立小中学校では、子どもたちが戦争の悲惨さを知り、命の尊さ、平和の大切さを感じるためのさまざまな学びの機会を設けています。

今回は修学旅行の平和学習で学んだ岡言生さん(作文執筆当時は矢部清流学園6年生)の作文を通して、改めて平和について考えてみませんか。

「みんなで幸せな生活を」

「こわい。」
「かなしい。」

「こんなことがあったなんて。」

ぼくは、修学旅行で長崎に行きました。長崎では、原爆資料館や爆心地に近い山里小学校に行きました。そこで、戦争について学びました。

原爆資料館には、被爆した人の写真や服や変形したビンや弁当箱などが展示されていました。ぼくは初めてそのような展示物を見て、こんな悲しいことが本当にあったのかと思いました。

山里小学校では「あの子」という詩を読みました。その詩には、

「ああ、あの子が生きていたならば」とくり返し書かれていて、戦争で子どもを亡くした人の

「生きていて欲しかった。」

という気持ちがよくわかりました。生き残ったのに、大切な人を亡くしてしまったから悲しい気持ちでいる人がいる、ということがわ

かりました。その時から戦争はいけないと思いました。

被爆した人の話では、戦争が始まる前まではみんな学校や仕事に行ったり、ちゃんとご飯が食べられたりして、いつも通りの生活をしていたけれど、戦争が始まったから学校や仕事に行けず、食べる物も無くなってしまったそうです。また原爆の力はとても強くて、爆心地から離れていたのに一しゅんて体がふきとばされてがれきにうまってしまったということを聞いておどろきました。

今のぼくは、学校に行けるし、食事もとれて、安心してねむることができます。でも、世界には今も家族とはなればなれになっている人たちがたくさんいます。そんなニュースを見て、普通に暮らしたいだけなのに、ある日突然、戦争にまきこまれて命をねらわれる人たちがいるのを知って、心が痛くなりました。日本では今戦争はおきていないけれど、貧困や家庭の問

題で学校に行けない子どもや、食事を十分にとれない人もいるそうです。そのような人たちのために直接、ぼくが何かをしてあげる事ができないけれど、困っている人がいたらその人に声をかけたり、車いすの人を手伝ったりしたいなと思っています。みんなで身の周りの人に親切にしたり、どんな人も差別しないで、支え合いの輪を広げていったりして、みんなが仲良く協力していく社会になることを願っています。

みんなの幸せな生活のために、自分にできることから行動していくことを決意した岡さん。私たちも一人一人、身近なところからお互いを尊重し、支え合いの輪を広げていきましよう。きっと誰もが人権を尊重される社会の実現へとつながるはずです。

法務省人権擁護局長から表彰状

多年にわたって人権擁護委員として活動に尽力されてきた平島豊彦さんに法務省人権擁護局長から表彰状が贈られました。

この表彰状は、人権を侵害された被害者の救済や人権相談活動のほか、人権思想の普及や人権擁護活動など地域に密着したさまざまな活動をたたえるものです。



第2回人権セミナー 八女2023開催

スマホやオンラインゲーム等、子どもを取り巻くインターネットと人権の現状や課題について、一緒に考えてみませんか。



- 日時 8月24日(木) 19時～20時30分
- 場所 立花市民センター
- 講師 古野陽一さん
- 演題 II デジタル社会の子どもたち意外なところで起きている子どもの権利侵害
- 申込不要、参加無料。詳細についてはチラシやホームページをご参照ください。